

岩手県東日本大震災津波復興委員会女性参画推進専門委員会
平成 30 年度現地調査の概要について

1 目的

女性参画の推進に関する現状や課題を実地に調査し、専門的な見地から復興計画の進捗等に関する意見をいただき、「復興実施計画（第3期）」の推進に反映させる。

2 実施日

平成 30 年 5 月 25 日（金）8:15～18:20

3 調査先

(1) 釜石大観音仲見世通り

[相手方] 戸塚絵梨子氏

[内 容] 首都圏と県沿岸部との人材交流促進についての取組内容

(2) 創作農家レストランこすもす

[相手方] 藤井サエ子氏

[内 容] 地域色を生かした事業の取組について

(3) 釜石地区合同庁舎

[相手方] 内金崎加代子氏、藤原悟美氏

[内 容] 沿岸部における女性の企業についての課題

4 調査者

赤坂委員、植田委員、神谷委員、菅原委員、手塚委員、平賀委員、山屋委員、
(委員 7 名)

5 調査概要

(1) 釜石大観音仲見世通り

ア 戸塚絵梨子氏による首都圏と県沿岸部との人材交流促進等の取組経験についての説明

- ・ 大別して、都市から地域にかかわる方々をふやす取組と、地域の受け入れ体制を整える取組を行っている。
- ・ 都市から地域にかかわる方々をふやす取組として、研修ツーリズム事業、学生へのインターンシップ事業、移住につながるようなツアー等の実施による生活支援事業を行っている。
- ・ 地域の受け入れ体制を整える取組として、釜石市と一緒に時短勤務の推進、創業支援などを行っており、地域での多様な働き方、生き方をつくっていくことを目指している。
- ・ 人材マッチングの観点では、右腕人材が不足していること、そもそも人材不足である等の課題があったため、短い時間でも働けるような多様なマッチングを目指している。

- ・ また、釜石ローカルベンチャーコミュニティという取組を釜石市と行い、地域での事業創造、起業をサポートしている。その中で、地域外からの移住者の方を採用して、地域の資源を活用したビジネス創造を目指す起業型地域おこし協力隊を始めた。
- ・ 協力隊の拠点の一つとして、釜石大観音仲見世商店街のシェアオフィスマルダイを利用している。これは、釜石市の釜石〇〇会議のテーマの一つである、仲見世リノベーションプロジェクトによるものである。
- ・ こうした様々な取組がつながることで、釜石の振興につながればと考えている。

イ 戸塚絵梨子氏との意見交換

○山屋委員 都市から地域にかかわる方をふやすという活動について、地域の方々、例えば釜石や釜石近郊の若者など、そういう人たちが一緒にやろうとか、ここに入ってくるというような、そういう現象が起きているということはあるですか。

○戸塚氏 創作農家こすもすさんのところで中心にやっている甲子柿を題材にしたツアーを数多く行っておりまして、主に大学生ですけれども、釜石に来て甲子柿の農家さんと一緒に剪定作業をするのですけれども、すごく甲子柿に対しての愛情みたいなのが強くなって東京に帰るのです。初めは、何回も訪れるという形だったのですけれども、そこから東京でも売っていけないとか、東京で甲子柿を知ってもらうためのイベントをできないかということで、そういったものを企画するようになっています。

初めはやはり来た人だけ、いわゆるよそから来た人たちだけの取り組みだったのが、地域へのグリーンツーリズムというか、生産者の家での民泊をやらせていただく中で、生産者の方が、何で東京の若者がそんな甲子柿に夢中になっているのか、わけがわからないみたいなことを言い始めて、東京と一緒に見に行こうよということで、東京のバーで1日店長するとき甲子柿のご紹介をいただいたりとか、あとは学園祭で甲子柿の甘酒とかを売っていたのですけれども、それも4日間丸々全部生産者の方も一緒に来ていただいて、一緒にご説明しながら売ってというようなことをご一緒させていただいています。

○山屋委員 例えばこの地域の若い方、学生などは、見に来たりとか、加わったりとかということはあるですか。

○戸塚氏 甲子柿の例でいうと、釜石高校の科学部で甲子柿を研究しているのですけれども、そこの子たちとのディスカッションをツアー中にやったりはしています。ただ、活動自体にやっぱり巻き込むのは難しいなというのはすごく課題としても感じています。

○山屋委員 もう一つ、戸塚さんが生産の現場を知って、とても興味を持ってここでこういう活動を広げられたと。「生産の現場」については、特に都会の人たちは知りたがるというか、そこにいろいろなものを感じられる部分があると思いますが。

○戸塚氏 そうですね。興味があつて来るというよりは、こういう世界があつたのだということに来て初めて知るという感じに近いかもしれないですけれども、やっぱり漁師の方の被災されてからの今に至るまでの思いというよりは、裏側にきついろいろなものがあるのだろうけれども、笑い飛ばしている今の姿だったりとか、何でこんなに底抜けに明るいのだろうかとかというようなところが一番印象に残ったとか、心が揺さぶられた

というような感想をいただくことが多いなというふうに感じます。

○平賀委員 とてもおもしろい取り組みだと思うのですが、何かこういうことをするときには必ず資金というものが必要になると思うのですが、その資金源というのはどのようにして生み出すのでしょうか。

○戸塚氏 ここは、まさに今私たちの会社の一番の課題でもあるのですけれども、現状の資金源は七、八割方をいわゆる業務委託とか、岩手県様、釜石市様、あるいは国のそういった事業、復興庁とか、そういった事業の予算に頼っているという現実があって、それをいかに脱却、ゼロにするというわけではないのですけれども、少なくとも半分は民間の自主事業で成り立たせていくという形をどうやってとっていくかというところが今私たちの団体としては一番の課題かなというふうに感じています。

そんな中で、例えば地域のマッチング事業とか、インターンシップも一部そうなのですが、地域の事業者、経営者の方からお金をいただきながら回していくという形で、自走可能な形をつくっていけないかということで、少しずつ、少しずつその割合をふやしていっているという感じです。

あと、研修ツーリズムに関しては、都会の企業や学校が出してくれるので、いわゆる公のお金は入っていないのですけれども、そういったちゃんと自立した事業になっていくための割合というのをふやしていきたいなという現状です。

○山屋委員 遠くの都市から来てくださる方とか、あと海外の方々のことについてお聞きしたいのですけれども、アジアの方などが、興味を持たれて入ってくるような状況はありますか。その割合がふえているとか、実際に外国の方々が来るというようなものがあるのかお聞きしたいのですが。

○戸塚氏 たくさんの事例があるわけではないのですけれども、台湾の方がいらっしゃったときに伺ったのは、台湾の方は日本へのハードリピーターが多いというか、東京、大阪、福岡、北海道、そういう有名どころ、京都などは行き尽くしていて、まだ見ぬ日本を探しているみたいなことをおっしゃっていました。台湾とか韓国とかは、日本にたくさん来ている人がいて、そういった方々に向けて、誰も知らない日本だよと、まだ台湾で知られていないよ、韓国で行った人は多分いないと思うよみたいな形で、来てくれる層は一定数いるのではないかみたいな話は、台湾の方がおっしゃっていました。

そのときに、冬だったのですけれども、一番興奮していたのは雪でした。あとは、雪の中、漁業体験ということで船に乗せていただいたのですけれども、本当に寒くて、台湾は暖かい国なので、本当にもうテンションがた落ちだったのですけれども、その後にこすもすさん、藤井さんのところのおうちに行かせていただいて、お風呂入ってこたつに入ったりしていたのですけれども、それがもう幸せ、幸せとずっと言っていました。こたつ、こたつとずっと連呼していました。そんな感じです。やっぱり日本の暮らしにすごく迫れるというところが魅力なのかなと。

○山屋委員 そこが売りになっているのですね。わかりました。ありがとうございます。

○菅原委員 都会の方で、支援していただいている方たちが結構いらっしゃるというお話でしたけれども、そういう方たちはどういう思いで支援をしているかというようなことは、お聞きになったことはありますか。ただ何となくなのか、何か目的を持って、地方創生とか、そういうことに興味があるものなのか、何をもって釜石にそういう

支援をしようと思われているのかという部分について伺えますか。

○戸塚氏 先ほどご紹介のとおり、私も、あと一緒にやっているメンバー2人も、全員初めは支援で入ったのですけれども、やっぱり一様にして、支援したいとかというよりは、自分自身の学び、キャリア、成長につながるから、東京で絶対体験できないことができるとかということが多く感じます。何か支援できないかな、助けられないかなとかというような感情で継続している人は余りいない感じがします。初めのきっかけとしては、もちろんボランティアしたい、何か支援したいというところから始まるのだと思うのですけれども、出会いの中で圧倒的なファンになるというか、まずはこの人のために何かしたいなみたいところが次のステップとしてあって、その次にこの人たちと一緒にやっていることで、自分たちが今まで経験したことがないことができる、あるいは会社で力を発揮できずにもやもやしていたとすれば、何か発揮できる場所があるかもしれないとか、そういった自分たちの役割をこういった場所を感じて、継続的にかかわっている方が多いように感じています。

○菅原委員 いわゆるビジネスでもうけようとかと、そういう話ではないのですね。

それから、学生のインターンシップのところなのですけれども、沿岸地域では大学生を引き受けるというような企業が余り多くないとか、なかなか来ても学生が満足してもらえないとか、何かいろいろやっぱりミスマッチがいっぱい聞こえてくるのですけれども、そういうことは皆さんが間に入ると少なくなるということなのではないでしょうか。

○戸塚氏 そうだと思っています。ミスマッチが起きる大きな要因としては、お互いの期待値が違うということが大きいとされていて、企業としては忙しいし、手伝ってくれるみたいな期待をしている企業が多いのかもしれないのですけれども、学生としては当然成長の機会だから、東京でできないことが学べるからとされている場合が多いです。企業も別に人手として使いたいわけではなくて、その部分を説明することによって、新しいアイデアを試してみる期間にするとか、そういう学生が来ることに対しての目的を設定することができるのかなとされていて。なので、その両者の期待値だったりとか、やりたい思いみたいなニーズを調整するというのが、私たちみたいな中間でコーディネートしているところの役割かなとされています。そういったコーディネートができると、企業も学生も本当に大満足して、この間の夏のインターンとかもそうなのですけれども、帰って行って、今でも、例えば藤勇さんでインターンした子だったりとかは、東京で藤勇さんのイベントがあると必ず手伝っています。そんな感じの出会い、つながりが生まれている感じがします。

○菅原委員 ここは女性参画推進専門委員会なので、特にすごく気になったのは、プチ勤務、主婦層の短時間勤務のマッチングをコーディネートなさっているということなのですけれども、これはどの程度うまくいっているのかなとか、将来そういう方たちが、地域の方たち、主婦層の方たちがこの事業を通じて、自立という大げさかもしれませんが、何かそういう希望を持てるようなものに変っていきけるのだろうかというのがすごく興味があるところなのですけれども、どこまでこれをやって、何を目的にして進んでいこうと思われているのかということをお聞きしたいなと思います。

○戸塚氏 これも初めは釜石市と一緒にスタートしている事業で、県の沿岸振興局も一緒にやらせていただいていたのですけれども、初めは本当に人手不足の企業があると。働

いていないのだけれども、本当は働ける眠れる労働力の存在、主婦層の存在がきつとあるであろうということで、マッチングの説明会とか、合同マッチングをするフェアみたいなのを企画するというのが初年度、2016年度にやったことだったのです。

その機会を設けることで、マッチングは初年度で25件生まれたのですが、昨年度課題として出てきているのが定着しないというところです。理由としては、企業でずっとベテランで働いていらっしゃるパートの方とか、正社員ではないのだけれども、ほぼ正社員のような形で、でも同じような時給で何十年も働いているような方との企業の中での折り合いがやっぱりつかないというか、その方々としてはモチベーションが下がってしまうし、何で自分より全然楽なのに同じ時給なのだみたいな話になってしまうし。主婦層の方としては、職場復帰ということで、すごくハードルが高いなと思いながら、恐る恐るスタートしている方が多いので、ちょっとそういう雰囲気を感じると、やっぱり自分なんかやってはだめだったのだということで、すぐ離れていってしまうとかということで、定着率がすごく低いというのが、昨年度の課題としてありました。なので、途中からマッチングをどんどん追っていくというよりは、企業の中で、パートの方の中での評価制度をつくるとか、研修を行うとか、そういった形で定着支援につながる、どちらかという地域の実業者の人材採用力とか育成力の強化をしていこうという形で、方向性を少しずつ変えている状況です。

私たちの会社としては、地域の会社との接点というのは、インターンもそうですし、研修ツーリズムもそうですし、こういったプチ勤務とか人材マッチングとかということに何とかつながっていく話だと思っているので、その地域の事業者の課題解決というところに注力していきたいなと思ってやっています。

○菅原委員 やっぱり私としては、この地域の方たちがそういう人材として輝いて働いていけるような地域になっていただきたいなというふうに思って、人手不足随分言われているのに、なかなか活躍できていないというのが、この地域だけではなくて、いろんな地域で起きているわけですから、そこがうまくいくようなモデルをぜひこの地域でつくってもらって、そしてこういうふうにとやるとうまくいきますよというモデル形を情報発信してもらえれば、釜石でできたことは、当然盛岡でもできるわけだから、もっといろんなところに波及して行って、いい効果になっていく可能性が高いと思うので、ぜひ、こうやればうまくいくみたいなものを示していただくと、非常にうれしいなというふうに思いますので、それを次に期待したいと思います。

○戸塚氏 頑張ります。まだマッチングのところと言うと、本当に一歩出てきてもらう、合同説明会の場に出てきてもらうまでも結構大変で、誰も来ないとかということがあるのです。

なので、子育て支援センターとかも、直接預けに来たお母さんとかに話しかけたりとかということをしていたりしているのですけれども、あとは必ず子供と一緒に来られるような環境にしたりとかということもですね。

でも、そこで来た方々が言うのは、やっぱりすごく恐る恐る来たけれども、そのマッチングの機会の中で経営者の方がいて、経営者の方が自分の子供を認知してくれるというか、見てくれて、こういう子がいる状態で働くのだなというのをわかってくれた状態で受け入れてくれるというのがすごく安心感につながったというような話が出てい

て、なのでマッチングの場をつくっていくというところで必要なエッセンスみたいなのが少しずつわかってきたなというのが現状で、あとはどうやって定着させていくかですね。せっかく出てきた方がやめてしまわないようにという。今年度頑張ります。



(2) 創作農家レストランこすもす

藤井サエ子氏による地域色を生かした事業の取組についての説明

- ・ 楽しむことで、釜石が元気になればいいなという思いで始めた。
- ・ お店で出す野菜は、できるだけ自分で作ったものを出し、自分でつukれないものは、ご近所からまとめて売ってもらうという地産地消を進めている。
- ・ 震災の時は、避難所に夕御飯を届けた。また、仮設住宅でなくなった子供たちの遊び場を作りたいという思いから、ボランティア協力のもと、こすもす公園をつくり上げた。
- ・ 2015年に、甲子地区活性化協議会ができ、釜石を元気にするという思いのもと、3年間会長を務めた。
- ・ 甲子柿については、生産者が高齢化し、秋になっても柿の実がそのまま放置されているような現状があり、それを何とかしたいという思いから、活性化協議会で様々な取組をした。



(3) 釜石地区合同庁舎

ア 内金崎加代子氏による沿岸部における女性の企業についての課題についての説明

- ・ 「すべてはママの笑顔のために」ということを掲げ、子連れでも楽しめる、気軽に入れる店をつくりたいという思いから始めた。震災後、仮設住宅を周り自転車の

無料点検の際にお茶と手作りケーキを提供しチャリカフェを始動、また、地元のショッピングセンターで子供向けにじてんしゃ乗り方教室等の活動を行った。

- ・ 専門家派遣制度を利用し、チャリカフェのコンセプトづくり、原価計算、メニューの開発、店のロゴ開発等を行った。
- ・ さんりくチャレンジ推進事業補助を受けてよかったこととして、高価な厨房機器をそろえることと、事業計画をつくることで迷わず方向性が決まったこと、交流会や勉強会で新たな出会いで事業につなげていくことができたことが挙げられる。
- ・ 沿岸部で女性が起業し、事業を進めていく上での課題として、家事と育児の両立、飽きさせないメニューの開発、売上の管理、資金の返済があります。また、沿岸部は店が少ないため、初期の備品をそろえることが難しいこと、人口が少ないことにより来てもらうのに苦労するということがある。
- ・ 今後の展望としては、看板商品の御社地大福の販路の拡大、地域のコミュニティスペースをして利用していただくための周知活動、女子向けにビューティーライダーのまちにするための仕掛けづくりをしたいと思っている。

イ 藤原悟美氏による沿岸部における女性の企業についての課題についての説明

- ・ 地方では、女性が社会進出をするための育休制度等があまり整っていない。また、震災によって大きく変わったコミュニティや核家族化によって、より被災地の主婦への負担は大きくなっている。
- ・ このような状況で、主婦にでも気兼ねなく、かつそれにやりがいを感じるができる仕事に出会えることができれば、それがパワーとなり、地域のコミュニティ形成にもつながるのではないかと考えている。
- ・ 今まで培ったコミュニケーション能力を活かし、育児と両立できる仕事として、キッチンカーを始めた。事業の内容は、平日のランチ営業を中心に、土日祝日のイベント出店等で大槌町の食を提供することで、大槌町の魅力を発信している。
- ・ さんりくチャレンジ推進事業の補助を受けてよかったことは、資金面はもちろんのこと、事業計画書等作成に関する知識が身に付いたこと、同じ創業者との交流が図れたこと、何をすることもサポートが充実していたことがあった。
- ・ 今後の展望として、従業員の雇用も考えている。その先には、女性活躍の場やにぎわい創出を通じた活性化づくりを目指していきたい。
- ・ 課題としては、現在、復興工事の作業員の事務所前でのランチ営業が中心となっているが、工事の進みにより、縮小の可能性があり、次の営業場所をどうするかというのが挙げられる。
- ・ 沿岸部での女性の起業について、女性が外に出て仕事をする上で、まだ子育てに対するサポート体制が不足していると思う。

ウ 内金崎加代子氏、藤原悟美氏との意見交換

○手塚委員 チャリカフェは、外観拝見していて、すてきだなと思っていたので、お会いできてうれしく思っています。

お二人に共通の質問と、それぞれにお伺いしたいことがあるのですけれども、お二人

にお伺いしたいのは、このさんりくチャレンジ推進事業をどういった場で知って、エントリーされたかというのが1つ。

もう一つは、民間や行政から何か支援を受けたとか、起業に向けた塾に行ったとか、そういうことがあれば教えていただきたいです。

あと内金崎さんにお伺いしたいのは、推測するに自転車の販売につなげていくという目的もあるのかなと思ったのですが、自転車販売の売り上げというのは震災の前と後でどういう感じなのかというのは、差し支えなければちょっと気になるなと思いました。

藤原さんにお伺いしたいのは、盛岡ご出身で石巻の後に、大槌にいらっしゃったというのは、プライベート、ご家族の事情なのか、何で大槌なのかというのが1つと、店舗ではなくてキッチンカーを選ばれた理由というところを教えていただければと思います。

○内金崎加代子氏　さんチャレのエントリーは、商工会の方からどうですかという、最初はさんりく未来推進センター、宮古にあったのですが、そちらの方から声をかけられて、チャレンジしようと思ったのですが、ちょっとお店を建てる時期と合わなくて、一回断念して、それからまた時期を見て、今回、今だなというときに応募した感じです。

ほかには、商工会さんであるセミナーだったり、何かそういうのには結構出たりとかしていましたし、あとは役場の方、商工観光課の方々にもいろんな相談、資金面のことや国の補助金の関係、そちらもいろいろとたくさん相談して、商工会の方と役場の方には本当にお世話になりました。

あと売り上げなのですが、やはり仮設の店舗はずっと山奥だったものですから、今回は町に出てきたので、あとはテレビで取り上げていただいたり、新聞で取り上げていただいたりしたこともあって、お客様が結構来てくださっていて、オープンしたからというものなのですが、自転車の販売も結構前よりはずっとよくて、周囲のほうも町なかなので来やすいし、行きやすいしというのがあって、ご利用していただいております。

○藤原悟美氏　私は、さんりくチャレンジ推進事業をネットでいろいろ補助金のことを調べているうちに見つけました。それで、起業に関する勉強というのは改めてしていませんけれども、夫が起業者であるということなので、夫が先生というか。あとは、釜石のほうにキッチンカープロジェクトがあったと思うのですが、夫がそちらの元代表の方と知り合いだったので、その方にいろいろキッチンカーに関してのこととか教わったりしました。

震災のときは石巻にいたのですが、出身は盛岡ということで、石巻のほうには仕事の関係で引っ越したのですが、石巻のほうで主人が震災後に起業しまして、その際キッチンカー使っていたのですが、私はその手伝いをしながら、そのときにキッチンカーっておもしろいと、ずっとやりたいと思っていたのですが、そういうこともあって、今回はキッチンカーがどうしてもやりたかったのです。大槌に来た経緯というのは、主人の仕事の関係です。以上になります。

○手塚委員　わかりました。ありがとうございます。

○菅原委員　両方の方が家事と育児の両立とか、子育て支援とかがやっぱり仕事する上で

は大変だとおっしゃっていましたがけれども、具体的にどんな支援があればもうちょっといいのかなというふうに思っていることがありますか。保育所に子供を入れたいと思ったけれども、実際は皆さん働いているということで、すぐ保育所に入れなかったとかということもあるかもしれない、そういうところを変えてほしいとか、何か具体的にこういう支援が欲しいとか。大学とかだと、今女性の研究者は研究支援員が欲しいと言われていて、子育ての期間だけ特別に支援する人をつけているのです。9時から5時まではいるのだけれども、その後保育所に子供を迎えに行かなければいけないが、仕事がどうしても終わらない、だから2時間でもいいから支援する人をつけてくれとかという要求があって、そういうのを今大学は研究支援者、補助者というのをつけるというようなこともやっているのです。だから、皆さんが具体的に両立のために何の支援があったらもっと働きやすいのかというのがあるのであれば、ぜひ聞かせていただきたい。ただ漠然と両立が難しいですというのはみんなそうなので、それではなかなか解決にはならないのですけれども、具体的に何かイメージがあるのであれば、お二人から、自分たちがそれぞれの起業した段階で、それぞれ職種が違うので、あるかと思うのですけれども、具体的に教えてもらいたいと思います。

○内金崎加代子氏 家の片づけが間に合わないのですね。何か家事というか、そういうのを手伝うサポートとかあるとうれしいなと思います。やればいい話なのですけれども、時間がないというか、時間の作り方が下手なのかもしれないのですけれども、子供が2人いると散らかるのはどうしようもないと思いつつ、何か家事のサポートというか、そういうのがあるとありがたいなと思います。

○菅原委員 サポート制度みたいなのが、よくお金払えばあるではないですか。仕組みとしてはお金払えばあるのだけれども、そういうのを幾らか補助を出してほしいとか、実際には難しいとは思っているのですけれども、制度として、この辺にはこういうのを使える仕組みとかはあるのでしょうか、大槌とかは。

○藤原悟美氏 大槌にはないです。保育園についても、全部が全部保育園に頼めるかというと、そうでもない。土曜日は最近見てもらえますけれども、日曜日というところも見てもらえないところがないですし、そういったときに日曜日も見えてくれるような、そういうサポートがあればいいかなというふうに思ったりします。

石巻だと、私見ますよという方が登録して、その登録した方を見られる方かということを確認ではないけれども、審査して、そうしたらあとは見てもらいたいと手を挙げると、ではそこ見ますという形で見てくれる、民間の方々が見てくれるというのが、そういう制度があったり、結構石巻はもっと充実していたのかなと思うのですけれども、そういうのがもうちょっとこっちのほうでもあったりするといいなと思います。

○菅原委員 多分日曜日に見てほしいとかというのはどこでもある話で、盛岡はあるのですね、そういう見えてくれるところが。だけれども、こちらにはないのですね。ということだとすると、やっぱり何かそういう仕組みをどこかでつくってもらえればいいという話になると思うので、実際に起業したりいろいろ働いていると、地域ではそういうニーズがありますというふうなことは、ぜひ声を上げたらいいのではないのかなというふうに思います。

○藤原悟美氏 みんながみんな土日は休みというわけでは、今はそうではなくなってきて

いると思うので。

○**菅原委員** そういうところで地域の差、例えば盛岡とか石巻にはあるけれども、大槌とか、釜石はわからないのですけれども、ないのだったら、ほかができていのになぜ大槌はないのだという話に当然なるわけで、誰かが声を上げてやってもらう。ここから出せば実現できる、ここからこう行ってああ行けばできるかもしれませんし、というようなことになるのかもしれませんがね。

○**植田委員** 質問ですが、このさんりくチャレンジ推進事業、今ほかにも皆さんの周りでもこういうのに挑戦してみたいという、同じような女性の方とかいらっしゃるのですか。

○**内金崎加代子氏** います。相談受けて、こんな感じで作ったよという資料とかを見せたりして、説明会に行ってきましたという方もいたり、頑張ってもらいたいなと思っています。

○**植田委員** 私は住田から来ているのですけれども、住田では、私は知っているのですけれども、どこでこういう補助があるとか、やりたいと思っている人がこの情報に触れるという機会が住田では多分まだなかなか知られていないのかなと思ったので、大槌で周りにそういう方がいらっしゃるというのはすごくいいなと思いました。

あと、これは個人的なのですが、私は住田町でレストランをやっているのです。イベントをよくやるので、大槌からでも出店、もし可能であればぜひいつでも来てください。

○**平賀委員** 女性が仕事をするとき絶対に家事や育児の問題がうまくいかないという話、仕事しにくいという話で、それをサポートする仕組みというのはつくるべきだという話がこの前も出たと思うのですが、今回もまた同じ話になって、結局全然解決していないということだと思うのです。それで、やっぱり女性がこうやって仕事をして、地域の中で何らかの社会活動をしたときに、それをサポートする仕事というのがまた新たに生み出されていて、二重に仕事ができるというか、生み出されていくと思うので、ここはさらに仕事を広げるという意味で、ぜひ何とか考えたいし、考えていかなければというふうに思います。

私自身もちょっと体の調子が悪いものですから、家事、家の中のことができないというのを私自身が抱えていまして、私は週に1回だけですけれども、家の中をやってくれる人を個人的に頼んでいます。その人にとっては生活上、あと月に何万かお金が欲しいという話だったので、それならばその全部は私が持てないけれども、一部は何とかできるかもしれないからといって家に来てもらって、お金を払っています。

ですから、そういうふうに個人的に大変だなと思ったときに、誰か手伝ってくれる人いないかというふうに声を出してみると、意外としてあげてもいいとか、あるいはそのことで若干のお金が手に入ったらいいというふうに思っている女性は結構いると思うので、自分一人で我慢しないで、恥ずかしいことでも何でもないので、大いに声を出したほうがいいのかというふうに思います。必ず地域の中にはそういう人たちがいます。

○**菅原委員** そういうことを通じて、そういう方が今度は起業してもらって、しっかりとした仕事にしてもらえれば、継続的に回っていく仕組みになると思うので、ぜひ今度手を挙げたい方にそういうのをやったらと提案をしてみてもいいかもしれませんね。そうではなくても、今の話、周りにはサポートしてくれる人は必ずいるだろうということだ

と思います。

- 平賀委員** こういう食べ物の事業というのは、最初は小さい子供さんを持っているママのためにとかということで始めることが多いのですが、社会のこれからの人口のことを考えたときに、高齢者がふえていって、高齢者が簡単なお食事をするところというのがすごく求められていると思うのです。ですから、地域の状況をよく見ながら、地域の中に住んでいる誰でもが来て食べられる場所、栄養のあるものが食べられる場所というのは、これからニーズがすごくふえていくと思うので、そっちの方向もあわせて考えていただければいいかなと思います。そんなふうに、今朝のニュースでもやっていたけれども、コンビニなどで中食というのですか、半分調理されたものの売り上げが猛烈な勢いで伸びているという話がありました。ということは、自分の家で調理ができる、あるいはもうできなくなっている人がすごくふえてきているということだから、そういう意味でもこういう仕事というのはすごく地域の中で大事な仕事になって、地域をつくっていくのに大事な仕事になっていくのではないかなというふうに考えますので、ぜひ頑張っていよいよお仕事を続けていただければと思います。
- 手塚委員** 産業再生課にですが、これまでのさんりくチャレンジ推進事業を活用した全体の数と、そのうちの女性の数伺いたいのと、もう一つ、さっき内金崎さんのお話で、内金崎さんがこの制度を使ったことによって周りの方も多分関心を持ったりというところもありましたけれども、もしこの事業を活用して、何か沿岸の地域差がもしあるのだとすると、そういう内金崎さんみたいな方がいらっしゃるにはその周りで波及効果として活用される方がいて、具体的に周りに使っている人がいないと、この制度を知らない地域もあったり、そういうことももしかしたらあるのかなと思いました。
- 小原産業再生課総括課長** まず、女性の割合ですけれども、去年、29年度は採択が44件あったのですが、そのうち女性は9件です。内金崎さんは旦那さんのほうで申し込まれているのですが、自分が女性ということで来た方は44件のうち9件、それから28年度は14件のうち女性が5件となっています。波及効果という話だと、去年は温度差があって、割と1回目は陸前高田からたくさん来て、その後久慈のほうで広がっていった、いろいろ口コミもあって、3回目は結構久慈、種市から多く申込がありました。あとは正直言って地域間の温度差みたいなのもあって、非常に大槌などは商工会さんが頑張って、親身にやって下さっていますが、そうでもないところだと若干件数少ないのかなというところもあります。ただそうなるとうっかり地域間の温度差によってばらつきがあるというのは地元の人に非常に気の毒な話なので、ちょっと去年件数が少なかったところについては、今回は重点的にぜひ使っていただきたいということでPRを強化していくことは考えているところです。
- 手塚委員** 今年度で終わりというのは、全体の予算の関係で当初からそういう予定だったと。
- 小原産業再生課総括課長** 県の中の事業の仕組みの話ですが、大体3年のプロジェクトでやりましょうという事業と、あと特に期限決めないでやるような事業があるのですが、これについては希望郷推進費という3カ年プロジェクトでやりましょうという事業で予定をとっています。これの前身の事業では、起業者だけを対象とした事業をやっていたので、そちらを3年で一旦終了して、28年度からは起業者と新事業で新

たなビジネスやる人とどっちも支援しましょうということで見直して、28年度、29年度、30年度とやったので、一応3カ年プロジェクトということで予算をとっているのですが、今年度、30年度で一旦この3カ年の事業の事業効果を検証して、また31年度以降は何をやっていくかを県として考えていきます。ただ前の事業、それから今回のさんりくチャレンジ推進事業で相当数の方に起業とか新事業で事業を立ち上げていただいたので、それについては何とか継続的にもうちょっと時間をかけて支援するように、人口も減っていますし、どうしても販路開拓とか、新たなところを見つけるというのも大変なので、そういうところの支援については31年度以降の事業として考えていきたいと思っております。

○手塚委員 よくわかりました。ありがとうございました。

○菅原悦子委員 女性の起業家は少ないと、起業する人は見るとそんなに多くはないので、やっぱりネットワークづくりみたいなのが必要なのではないかなと思うのです。横の連携が。そうすると、例えば内金崎さんと藤原さんはもともと同じ大槌で、同じような事業を使って起業したということで、仲間でいろんな情報交換ができる、そういう場があると継続しやすいというふうには一般に言われていますので、何かそういうことも今後、自分たちで自発的にやるというのもあると思いますし、県の人たちと一緒に相談していただいて続けていくというような形もぜひ考えてみていただければ、お互いに情報交換して励まし合うというか、女性の場合にはそういうやり方をしていくとお互いにエンパワーメントし合っとうまくやっていけるのだというような話をよく聞くので、私は専門家ではないので、勝手なことを言っていますけれども、そんな話をよく聞きますので、そういうことをぜひ考えて継続して、今お話に出ているようにこれからはせっかく起業したものが継続していかないと意味がないので、ぜひそういうことを考えてみていただければなというふうに思います。

○小原産業再生課総括課長 その件につきまして、交流会もやっぱり大事だということで、昨年度も各地域で、宮古、久慈、釜石で同じような起業家の方が集まるような交流会をやりました。その中でお互いに自分の商品を持ってきたりということで、去年は釜石の交流会の中で、内金崎さんのところで大野木工のお皿を使おうとか、お茶の葉も仕入よう、という話も出てきているので、そういうのも最初は県のほうでやっていきますが、その中でだんだん本当に自分たちの中で交流ができて仲間ができれば、それはご自分たちでというか、特にその中でつながった方々とまた続けてやっていただければいいかなと思っております。

釜石で交流会をやったときに、もう一人キッチンカーをやっている方がいらっしゃって、その方は週1回ここに来ていますという話で、釜石市とか役所関係を曜日を決めて回っているということで、役所は12時から1時とお昼休みが決まって、みんな大体12時にぱっと出て、買うのは大体20分ぐらいなので、それでだめだったら別のところに行くということで、昼に商売をする相手とすれば、その20分で売れるか売れないかがわかるからやりやすいそうです。ある程度、ここもほとんど単身赴任とか独身で、お昼を自分で持ってこない方も多いので、そういう意味ではキッチンカーを出す場所としてはなかなかいい職場なので、役所をいろいろ検討されるといいと思います。



(5) 現地調査全体を通したまとめ（委員による意見交換）

○赤坂委員 仲見世通りのパソナ東北創生のお話、若いといろんなことをチャレンジできるなど思ったのと、モデル事業としてもうちちょっと確立して、彼女たちの会社くらいの情報発信をるところまで行ってほしいなと思いました。

レストランこすもすの藤井さんは、幾つになっても夢を見続けようという標語みたいなものが張ってあって、幾つになってもやっぱり、起業するのは若い女性というか、若者と女性だけではなく、私たちみたいに年配になってもいろいろ勉強したり、いろんなことにチャレンジするのはとても素晴らしいことだなということを今回感じました。それで、東京と釜石をつなぐツアーとか、チラシでいっぱいもらったのですけれども、盛岡と釜石というものもあっていいなと、浜千鳥さんとか、それこそ甲子柿さん、飲めるのはやっぱりツアーで来たときだなと思いました。

○植田委員 私も3年目なのですがけれども、現地調査では沿岸のほうに来ていただいているので、私も含めて知っている方もいれば、きょうのお二方みたいに近くにいるのに知らないという方にも出会えるので、とてもありがたいなと思っています。

やっぱりこうやって実際にこの補助金を使って事業を行っている方のお話が聞けるというのは、私たちが何カ月間に1回集まって会議をしている意見がちゃんと届いて制度になって活用されているのだなとわかるので、そういう機会をいただけるというのはとてもありがたいなと思いました。

○神谷委員 皆さん、お疲れさまでした、盛岡から。ふだん我々沿岸チームは2時間半かけて盛岡に行って帰ってくるという、結局2時間の会議に出るのに6時間移動しているという逆パターンを経験していただけて、逆にその辺でありがたいなと思いました。

私は戸塚さんの事業のほうも全部知ってはいたのですが、お二人がさんりくチャレンジ推進事業を使ってやられているというのは、きょう実は初めてというか、この行程表をもらって、初めてそうだったのだと知った次第だったのですが、逆に使っていただきありがとうございますというのと、特に内金崎さんとか本当に地元の人が使っていることによって、では私もと思う方がふえるのかなというのはすごく思うので、ぜひ何か、普通の女性という言い方は変なのですがけれども、本当にパートで働いているとか主婦している人は、そもそもさんりくチャレンジ推進事業というステッカーなりキャラクターなりがあったとしても、全くそれが何かわからないという状況にいると思うので、そこを今回のこの事業は今年度で終わりということなのですが、今後の女性支援の何かしら

の補助金だったりというのがさまざまところで続いていくときに、商工会さんだけを窓口にするのではなくて、それこそ住民課とか、保健福祉課とか、女性が基本、特に子持ちの女性なら必ず行くようなところでも情報を得られるような方法にしておいてほしいなというのが今話を聞いていて思いました。

お二人は、旦那さんが商工会にそれぞれ入っていらしたりとか、そういう関係で情報を得ることができたりということだったと思うのですけれども、そうではない女性の方のほうがほとんどだと思うので、そこは今後もしろいろと進めていってほしいなと思いました。

もう一つ思ったのが、今回多分お二方がこの推進事業の補助金を使って、特に起業をした大きな契機は、やっぱり東日本大震災というところがあったかなと思うのですが、今後近いうちにはそんな大きな、いい意味でそういう契機になるような災害がないとすると、ただ 50 年後には今ある職業の半分以上がなくなっていると、岩手だと多分もっと顕著だと思うのですが、そういう中でもっと中高生、小学生ぐらいから職業は選ぶものではなくて自分でつくり上げていくものなのだという意識を植え込まなければいけないのだろうなど。そこら辺は、やっぱり都会の学校だったりの教育機関と比べて岩手はなかなか少ないなというのが都会で育ってきた私は感じてしまう部分があるので、せっかくこれすごくいい取り組みなので、何とかこれを教育機関に広げていって、職業体験みたいなのを今ほぼ必須で全部の中高はやっていると思うのですけれども、そこに起業体験、もっと小さいことでいいので、自分でなりわいを起こす楽しさだったり、そのためには事業計画をつくってみる。文化祭の事業計画表を書かせてやらせてもいいと思うのですよね。資本金を渡してやらせるでもいいと思うので、幾らでも今のシステムの上に乗られる方法はあると思うので、起業するということが当たり前に語れるような風土に岩手を仕立てていかないと、岩手の将来はなかなか難しいのではないのかなと思うところがあるので、そこら辺も含めていろいろと県のほうでもシステムのほうを考えていただければいいなと思いました。

あと 1 点、先ほど大槌のほうでファミリーサポートシステムがないというところをおっしゃっていて、釜石はあるのですよね。大槌はないのです。私も実際働いている身として、本当に保育園のお迎え、1 個行ってくれば助かるのにそれが無いというのは、結構 5 時、6 時は鬼門ですよ。ちょっと会議が長引くともうお迎え行けないし、でも旦那は絶対動けないみたいな状況のときに、結局一番会議の重要なところで中抜けしなければいけないとかという状況になったりとかで、ファミリーサポートシステムがあればいいけれども、大槌町の今の自治体の現状として、それを立ち上げるだけの体力がないと。県が町に同等の立ち位置としてやりなさいということができないというのはシステムとして非常によくわかるのですが、結果としてそれで恩恵を受けられていない、大槌町からも県からも何の恩恵も受けられていないのはその住民になるのです。であったら、その自治体自体がそういうことを立ち上げる体力がないのであれば、少なくとも 3 年間は、もしくは 5 年間なりは県が肩がわりしてやるなりの何らかのシステムがないことには、結果として起業するなりなんの意欲がある女性がどんどんできなくなっていくというのは、何か結局県としても損していることなのではないのかなと思うので、確かに地元の自治体がやっていかなければいけないということは重々わかりつつも、ご

めんね、あなたの自治体にはないからと、何かそれは結局私たちが損しているという言い方はちょっとあれかもしれないのですけれども、事態になっているのは、ちょっと腑に落ちないという部分がすごくあるので、何かしらそういう力がない自治体をサポートするシステムというのを県のほうで考えていただけるとありがたいなと思いました。

○手塚委員 パソナ東北創生の戸塚さんのお話で、その中に出てきたローカルベンチャーという制度についてですが、今1期生が6人来ていて、2期生がこれから4人来ると。1期生が既に2人はもう釜石を離れてしまっているという現実があって、一方でこのお二人みたいに地元の出身だったりとか、地域に根差して起業されているという方もいらっしゃるのですが、まずローカルベンチャーを移住促進メインで、移住して来た人だけが対象となっている制度なので、その部分でなかなかやっぱり地域、それこそ商工会議所とか、青年会議所に入っているような方々とのつながりが薄い部分もあるので、内金崎さんたちが参加しているような交流会とかにそういう人たちが参加できると、もうちょっと地域のつながりもできたりするのかなというのが、私自身も結構彼らと近い立場にいるので、実情としてあるかなと思って、ちょっとお話しさせていただきました。

あとは、もう一つ、戸塚さんの話にあった短時間の育休明けのお母さんが仕事をするプチ勤務。プチ勤務のような比較的育休を明けて入りやすそうな制度、一方で課題もあるとおっしゃっていましたが、それとさんりくチャレンジのようなものを使って起業される方というのは、すごく違う層のようであって、意外に何かしらのきっかけがあればそういうパートタイムではなくて、一気に起業してみようというふうに思うような方々もいらっしゃると思うので、そういうきっかけづくりというのは、さんりくチャレンジが終わっても、三陸というか、沿岸の女性に限らないですけれども、沿岸の女性が新しいことを始めようとか起業しようと思うきっかけになるような事業というのは、何らかぜひ続けていただきたいなと思いました。

○平賀委員 釜石の仲見世通りですが、あんなにお店がなくなっているというのにちょっと愕然としたのですが、あれは原因は何であんなに誰も行かなくなってしまったのかなというのが、やっぱり潰れるについては何か潰れるなりの理由があって潰れているのだらうと思うのです。そこをあそこの方々が何とか再生しようと思って一生懸命やっていたらっしゃるのはとてもすばらしいことだと思ったのですが、よそから来ている人たちですよ。ですから、東京とかから来ている人たちが一生懸命頑張ってくださいというのは、それはそれでとてもいいことだと思うのですが、地元にとのぐらい定着できるのかというのがちょっと気になりました。地元の人をもっといっぱい入って、一緒になってその中でやっているのであればいいかなというふうに思ったのですが、よそから来た人が、思いつきみたいにやって、ある種自己満足になってしまって、地域の人たちに余り根づかないとか、そういうふうなことであっては違うのではないかなというふうに思ったのです。

というのは、岩手というところが、私は盛岡なのですけれども、盛岡はよそから来た人たちが、来てうまくいかないとすぐいなくなるというようなことで、よそから来る人は信用できないというようなことをよく言う人がいるのです。ですから、何かそういうようなことにならないように、せっかくこのチャンス、入ってきてくださっている若い方たちが、何とかよそから来て岩手の中に定着できる方法と、それから岩手の人と一緒に

になっているいろんなアイデアを交換しながらやれるということがすごく大事なのではないかなと、あそこを見ていて思いました。何とかうまく行ってほしいという願いを込めて、そういう感想を持ちました。

それから、農家レストランの藤井さんは、本当に素晴らしいなと思いました。何でもかという、地域に非常に根差していますよね。作物も自分のところでとれるもの、それから甲子柿のことにしても、非常に地域に根差しているということがその地域の中で成功する一つの秘訣なのではないかなというふうに思います。

私は、もりおか女性センターの中で起業応援ルームと、起業のことを一生懸命やっているのですが、今まで50人ぐらいの人が起業しているのですが、10周年をやった人がいるから、もう10年はたっているのですけれども、起業した人たちが一人も潰れていないというのがあるのです。だから、一生懸命考えて、やれる範囲の中でコツコツとやっていくというのがすごく大事で、ばあっと目立つことをするというのではないように思います。そんなわけで、どう地域に根差して、地域のためになる事業ができるかということをおもひで考えてみたらいいかなと思いました。

○山屋委員 きょうのお話を全部聞いて、2つの方向で考えなければならないのだなということを皆さんから教わった気がします。1つは、「実施者として一人の女性の夢やコンセプトを地元でかなえていく」というためにどうすればいいのか、もう一つはそのコンセプトを続けていくためには、またその地域に定着させるためには、これからの人口減少問題と、あわせて「子供たちにその姿をどう見せていくか」ということ、この2つを一緒にやっていかないと、いずれ例えばコンセプトを実現させるにしたって、需要がなくなったり人口減になって利用が少なくなってくると、続けていけなくなるということだと。だからといって、最初から、ではこれを地域のためにとか皆さんのためにと行っていくのは、今立ち上げた人たちにとってはものすごく酷ですし、実現したい個人の夢をかなえる前にそれまでかぶせてしまうというのもすごく大変なことだと思う。だけれども、人口減少はあと10年後、本当に岩手は大変な人口になりますし、ますますこれを放っておいたときに子供たちがこの地域でといったときに、ああ、そういえばああいう活動があったとか、この活動を自分たちもやっていきたいなと思っていけることが実は続けていけることや、今立ち上げた人たちの仕事を支えることになると思います。

なので、さきほど職業観の話もありましたが、私は子ども食堂をやっている、あれは子供のための施しではなくて、それこそコミュニティーづくりです。企業の寄附でやっているのですが、そのときに子供たちに知ってもらいたいのは、たくさん支える大人がいるということ、企業はお金をくれる人たちではないということを知っていただきたい。そこに「しゃいん食堂プログラム」というのを入れて、寄附をくださった企業さんに仕事体験と仕事説明をしてもらって、ここの地域にはこんな会社がある、こんな事業があるということを知ってもらうということをやっています。そうすると、子供たちは地元でそういう仕事があることを、こういう大人がいるということで、かなり職業観が広がっていきます。そこに来るのは、高齢者とか、学生のボランティアもいらっしやって、大人や学生たちが、こんなすごい会社がここにあったのだと、実はそこにエントリーして採用されたというような例もあります。なので、働く人の姿を今いる被災地の子供たちに見せるということ、実施する本人たちは大変だと思うので、それを周りで支えて

いくというような仕組みをぜひつくって、子供たちに見せてあげてほしいと思います。

そういう仕組みづくりが必要ですし、その2つの方向性、取組みをする当事者だけを応援するのではなくて、地域全体を見るのはやっぱり行政だとか、関係団体だとか、専門家の方たちができることだと思うので、そういう支え方、そしてそれを着実に地域、子供たちに残していくにはどうしたらいいのかなというのを考えた一日でした。

○菅原委員 改めて午前中の方も、それからお二人の方も、非常に若い女性の方たちが一生懸命頑張っているというのを見せていただいて、この大槌、釜石の地域はこれからますます明るくなっていただければいいなと改めて思ったところです。

午前中の分のところでは、やはり短時間でも働きたい方の意欲をどう持続させて働いてもらえるようにしていくのかというあたりが、私はすごく気になりました。そこをぜひやっていただきたいなと思いましたし、こすもす食堂の藤井さんは、本当に地に足がついたしっかりとした事業をなさっているなというふうに思って、改めてまた訪ねてみたいという気持ちにさせられたところです。

午後のお二人の皆さんは、本当に私たちがいろいろ考えたさんりくチャレンジにしっかりとエントリーしていただいて、それぞれの夢を実現しようと頑張っているというのを見せていただいて、私たちの委員会も存在する意義みたいなものを改めて感じたところです。そういう方たちを少しでも私たちの委員会がいい方向にサポートしていけるようなことになっていけばいいのかなと改めて思いましたし、家事の両立や子育て支援というのは、やっぱり女性が働く上での永遠の課題だなと改めて思ったところです。でも、地域で格差があるというのは非常にそのところを考えさせられたという感じです。盛岡に住んでいれば、何か手をかけてやってくれると思っていましたけれども、そんな話ではないとすると、どうしていけばいいのだろうかというのは全体で、私たちの委員会で考えていくべき今後の課題になるのではないかと思うところです。

今後女性が起業していろいろ挑戦していく方たちの支援も私たちの委員会の役割だと思うので、皆さんはぜひ継続して頑張っている姿をみんなに見せていただくということがこれから続く方たちの励みになっていくのかなと思います。ここにいるみんなが応援しています。きょうは本当にありがとうございました。